

---

# FAIRYTAIL ~ 姫と半吸血鬼 ~

月の歌姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FAIRYTAIL ～ 姫と半吸血鬼～

### 【Nコード】

N7684Y

### 【作者名】

月の歌姫

### 【あらすじ】

FAIRYTAILのお話ですっ！！

ぜひ、読んで下さいね

## #01「ジャンとの出会い」(前書き)

作者「先にいっておきます…ジャンはオリキャラです!!」

???「なんでそれ言うの?」

作者「それが私だからさ!!」

## #01「ジャンとの出会い」

時は夕方、ある森の手前に馬車が止まっていた。

「お嬢ちゃん、起きてくれるかい？」

そう言つて、馬車の主は少女の体を揺さぶり、起こそうとする。  
しかし、少女は起きそうにない。

（シーオン。おーきーなーよー）

それを見ていた赤い鬘たてがみを持つ幼竜が、腰まで届く灰金アッシュブロンドの髪の少女  
シオン・クラウドイオに伝えると、やっとシオンは体を起こした。

「うゝ…もう着いたんですか…？」

シオンは眠そうに目を擦りながら主人に聞く。

「んゝ…着いたってワケじゃないんだけど…ここからは歩きでいってほしいんだ…」

申し訳なさそうに主人が言った途端、少女の目つきが変わり、尋ねる。

「なにかあったんですか？」

「うん…この先に人狼の盗賊がいてね…この辺りの村は、ほぼやられてるんだ。本来なら…お嬢ちゃんの目的地まで送り届けてやりたいが…」

「その件で…泊まるはずの宿まで襲われた…ということですか？」

「ああ…。すまないなあ、お嬢ちゃん…」

馬車の主は申し訳なさそうに頭を下げる。

「別に構いませんよ。それに…無理言って乗せてもらったのは私のほうですし…」

シオンがそう言うと、主人は頭をあげた。

「そうだったね…。私は戻らなきゃいけないが…」

「あ、大丈夫ですよ？私、それなりに強いので…」

（アレ…それなりってレベルじゃないよね？）

主人が心配そうにシオンを見ると、シオンは笑顔でそう答え、いつの間にかシオンの腕のなかにいたフリーはツッコんだ。

「なら…いいんだが…。それじゃあ…気をつけてね」

そう言つて、主人は元来た道に戻つて行つた。

\* \*

「…行つた…よね？」

「行つた…ね」

馬車が去つた後、シオンはフリーに尋ね、フリーはそれに答えた。

「…じゃ、ケロちゃん、バツボさん、もう出てきてもいいよ」

そうシオンが言った途端、シオンの腰に付いているポーチからは、羽根の生えたオレンジ色のヌイグルミが現れ、右腕のプレスレットが銀でできたケン玉（？）がになり、同時に言った。

「「ぶはあ！！！！シンドかった……」」

「息ピッタリだね〜ケン玉さんとケルベロスは……」

息ピッタリな二人（？）を見て、フリーが感想を述べる。

「ワシはケン玉ではない！バツボじゃ馬鹿者      っ！！！！！！（  
激怒」

「バツボ……頼むから大声出さんというや！！！！耳、痛くなる……！」

ケン玉扱いされ怒鳴るバツボに、ケルベロスが注意する。

「……すまん、ケルベロス殿。つい怒鳴ってしまつて……」

「わかつてくれればええんや」

と、良い雰囲気なのにも関わらず、フリーが言う。

「やーい、ケン玉怒られた〜」

「「フリーのせいじゃろ／やろ……!?」」

「ボクのせいじゃないもん」

その瞬間、辺りの温度が下がったように感じた。  
三人（？）が後ろを振り向くと、恐ろしいほどの爽やかな笑顔のシオンがいた。

「フリー？ふざけるのも大概にしないと…私、怒るよ？」

「…スイマセン！！！！（汗）」

三人（？）の謝罪の声が響き渡った。

＊＊

その3時間後…、辺りは闇に包まれ始めた。

「すっかり暗くなっちゃたね…」

「ウム…もうすぐ夜になるな…」

「どっか、泊まれるところあるかなあ？」

「…うん…」

フリー・バツボ・ケルベロスの三人（？）が相談していると、



「…野宿になる…カナ…?」

と、遠い目でシオンが言う。

（（不味い!!））

こういう時のシオンは暴走する。

それを理解すると、三人（?）はすぐ行動を起こした。

「うんゴメン、シオン。お願いだから戻<sup>カムバックして</sup>ってきて!!（泣」

「だ、大丈夫やて！絶対に泊まるところ見つかるて!!（汗」

「ウ、ウム…そうじゃぞ、シオン嬢!!希望を捨ててはならん!!」

「…わかってまーす」

（（ぜ、絶対わかってない!!!））

三人（?）が諦めかけたその時、

「キミ、どうかしたんスか？」

その声の主は、三人（？）にとっては救いの神だった。

＊＊

声をかけてきたのは、シオンより4つ年上の12歳の少年　ジャ  
ンだった。

ジャンは跳ねた黒髪に黒目を持つ少年で、この辺りで母親と共に農  
作物を育て、それを食べたり・売ったりで暮らしているらしい。

シオン達はジャンとそんな会話をしながら、彼の家に向かっていた。

「へえ、マグノリアへ行こうとしてたんスか…」

「はい…でも…「いいんスよ」…え？」

シオンが答える前にジャンは遮ると、続けた。

「わかってるんス…あいつらのことは………」

ジャンは、そう言って俯いたが、すぐ咳払いをし、伸びをした。

「さて！早く家に行こうっス！！ウチの母ちゃん、怒るとメツチャ怖いんスよ、だからほら！！」

「わっ！？」

ジャンはシオンの手を引っ張って、自分の家へと向かって行った。

シオンに見えないよう…涙を隠して…。

しかし…シオンはその涙に気付いていた…。

## #01「ジャンとの出会い」(後書き)

作者「次回はナツが登場する…かも？」

ナツ「何故に疑問形!？」

## #02「会話」(前書き)

作者「今回は若干ですが…主人公の過去にふれたり、もう一人の主人公が出てきます！」

フリー「言っちゃだめじゃん…」(呆)

## #02「会話」

「いんやゝ食った、食ったあゝ」

「も、もう食べれんな…」

「おなかいっぱいだよ」

「…みんな、食べてすぐ寝ないで…。行儀悪いから…」（汗）」

ジャンの家で夕飯を食べ終えた直後、横になった三人（？）に、シオンは注意した。

「別にいいっスよ。それよりシオン…汗、流してきた方がイイっスよ」

「えっ？いいんですか？」

「ええって、ええって 女の子は清潔第一なんやから」

そう言ったのはジャンの母・ジェーンだ。

ジェーンはジャンとは違い、ベージュの髪に黒目だったが、目は同じだった。

「じゃあ…呼ばれますね」

シオンは笑顔でそう言うと、風呂場に向かった。

＊＊

ジャンの家の風呂はいわゆるドラム缶風呂だった。

だが、覗き防止の柵や雨除けのテントが張っており、快適だった。

「うゝ…気持ちいい」

シオンがそのジャン家の風呂を堪能していた時、頭に青年の声が響いた。

（…相変わらずガキだな…お前は…）

（あれ？シンが話しかけてくるなんて…珍しいね？）

（…確かに…そうかもしれんな…）

シオンは驚く様子もなく、心の中で相手の青年　シンに言った。  
彼は…シオンは肌身離さず持っている、紫色に輝く宝石のペンダント・絆石に宿るもう一つの意識。  
クロスクリスタル

シンは暫く間をおくと尋ねた。



（　　で、お前は何を悩んでいるんだ？）

＊＊

シオンside .

ストライクゾーン

直球、まさにそれだった。

シオンは目を細め、雨除けのテントの天井を見上げ、言った。

（…なんでわかったの？）

（体を共有するようになって3年…。それだけの時間を共に過ごせば…分かるに決まっているだろう…）

3年。

もう3年経つのか…あの牢獄から…あの人達に助け出されて…。  
シロン達の…力の制御者になって…。  
そして…あの男に呪いをかけられ、シンと…体を共有するようになってから…3年…。

（もうそんなに経つんだね…）

（ああ…）

暫しの沈黙の後、シオンが言う。

（元…に…戻るよ…ね？）

（元…に…戻る…ではない…だろう。必ず元…に…戻る…だろう、シオン？）

（そうだね…）

シオンは目を閉じ、今度は気になることをシンに尋ねた。

（ねえ、シン…ジャンさんが言…って…たあ…いつ…ら…って…）

（恐らく…あの馬車の主人が言…っていた人狼の盗賊…だろう…）

（やっぱり…）

シオンは黙った。

シンも黙っている。

だが、ため息のようなものをつくと言った。

（…シオン、今お前が何を考えているかは…理解しているつもりだ…。だが、今は止めておけ…）

(うん…そうだね…)

その言葉を最後に…会話は終わり、シオンは風呂から出ると、ジャン達がいる居間へと向かった。

＊＊

真夜中、居間でシオンがジャンと話していた時だった。音が聞こえた。

「!」

最初に気付いたのは、シオンだった。

「シオン、どうしたんスか？」

「しっ…何か妙な音が聞こえる…」

何かを齧る音と、噛み返す音、飲み下す音。それらが外 畑の方から聞こえてきた。

「ヤツらがきたみたいっスね…」

そう言ってジャンは、席を立った。

「およしよジャン！今度こそ殺されちまうよ！！」

「大丈夫っス！！母ちゃんはシオンと隠れてるっス！！」

そう言って扉を勢いよく開けると叫んだ。  
そこにいるであろう者達に…

「い、いい加減にするっスこの怪物兄弟！！オイラン家の畑をこれ以上荒らすんなら……？」

しかし、そこにいたのはジャンの知っている者達ではなく…

「……ア、アンタ…誰っスか？」

桜色の髪に鱗模様のマフラーを身に着けた少年だった。

## #02「会話」(後書き)

作者「なにげにエロいね…シンさん…」。

それにナツ…窃盗&つまみ食いしてるし…(呆「

シン「気にするな」

作者「いや、気にしようね…?」

### #03「ジャンの決意」

その後、少年を家の中に入れた後、少年は野菜を猛スピードで食べていた。

「オバちゃん！この野菜すっごくうまい！！！」

桜色の髪少年がジェーンに言った。

「ずっずっすよ…それはオイラと母ちゃんが…」人間の客さんなんていつ以来かね                   っ！そらっ、たーんとお食べ

「

少しムカついているジャンが少年に文句を言う前にジェーンがその背中を叩き、黙らせてから少年の前に野菜を置く。

「おっ   あんがとオバちゃん！！」

そう言って、さらに食べる少年にシオンが聞いた。

「ところで…あなたは？」

「ほへ？（オレ？）」

「……ゴメン。答えるのは飲み込んでからでいいから……」

口の中に含んだまま答える少年に、シオンは呆れていった。

少年は飲み込むと答えた。

「オレはナツ、ナツ・ドラグニル！オマエはなんていうんだ？」

「私はシオン、シオン・クラウディオだよ……で……こっ……」ボクはフリーっ」「わいはケルベロスやで!」「ワシの名はバツボじや!」「……だよ(汗)」

「 $\hat{\phantom{x}}$   
.....  
 $c$   
 $r$   
.....  
 $h?$ 」

紹介し終わると、ナツがバツボを見つめ……そして……

「?!?!ケン玉が喋ってる!?!」

「ケン玉とはなんじゃ！この無礼者が」

「！！！！！！！！！！」

と、お約束の会話をした直後、遠吠えが聞こえた。

「この声って…狼？」

(…まさか!?)

嫌な予感がしたジャンはドアを開けた

当…た…り…だ…つ…た。

「クソッ…！またか…！」

「またって何がだ？」

ジャンは最も見たくないそれを取って、ナツとシオンに見せた。

「ヤツらの…人狼の盗賊三兄弟からの予告状っス…」

悔しそうに拳を握りしめて…言った。

\*\*\*

ナツ・ジャン・ジェーンの順に風呂に入った後、全員居間に集まり、ジャンが話し始めた。

因みに…バツボはいびきをかいて眠っていたが…。

「あいつらは…オイラン家の野菜を食べてその味を気に入って…定



期的にここに来るようになったんス…」

「あいつらって?」

「最近問題になつとる人狼の盗賊やな…」

首を傾げるナツをよそにケルベロスが言った。  
ジャンはそれに頷いた。

「ケルベロスのいうとおりっス。まあ、正確には三兄弟の盗賊なん  
スけどね…」

「…いつからここに来るようになったの?」

フリーはジャンを気遣い、心配そうに尋ねた。

「オイラン家は一か月前っスけど…この辺りに現れたのは半年前っ  
スね…」

「「「!?!?!?」」」

ジャンのその言葉にケルベロス・フリー・シオンの3人が固まった。

「半年って…それじゃあ…」

シオンの言葉にジャンは悔しそうな辛そうな顔で頷き、シオンは口を押えた。  
ただ一人…ナツはわかってないらしく、頭の上に“？”を浮かべていた。  
フリーはそんなナツの耳に小声で教えられたおかげで、やっと理解できた  
…

この辺りで無事な家は…ジャンの家だけということに…

＊＊

その事実で誰もが言葉を失った時、今まで寝ていたバツボが言った。

「一か月か…随分ずいぶんと嘗めなられておるのだな…。ジャンとやら…その間にお主は…自らの誇りを胸に戦ったのかな？」

「戦おうとしてるっスよ！……………してるっスけど…！！」

ジャンはバツボの言葉に立ち上がると怒鳴ったが…あいつらに立ち向かった時のことを思い出し、黙ってしまった。

「…ムリなんスよ……………いざ戦おうとすると…足が震えて…戦えない

んスよ…。あいつらに…“意気地なし”っていわれても…言い返せないんス…」

「そりゃあ…いわれてもしかたn…ぶっ!？」

ナツが余計なことを言う前に、フリーがナツの頬を殴った。

「いつてえ…!なにすんだよ!！」

「ナツ…その先は言っちゃダメだよ…」

「なんでだよ!!？」

「あれ見ればわかるやろ…」

そこには、椅子に座るとテーブルに突っ伏し、何度も悔しそうに呟くジャンの姿があった。

そして、その傍にはジェーンがいた。

「ケロちゃん（ケルベロスのこと）…相手の人狼達…元々は殺す事も躊躇<sup>ためら</sup>わない残虐な盗賊なんだよ…だからこれは仕方ないことなんだよ…」

「けどいいのオバさん!? 畑が荒らされても!？」

「別にいいさ…野菜はまた作り直せばいい…けど、ジャンは取り返

しはきかない。私の<sup>あたし</sup>たった一人の肉親だからね…」

その言葉で、誰も何も言えなくなり、ひとまず解散した。

＊＊

シオンは…青紫色の空に包まれ、青と赤の月が重なりあっている不思議な世界にある、薔薇の庭園の真ん中にある噴水の前にいた。でもそこは…世界のどこにも存在しない場所だった。

何故ならここは…シオンの心が生み出した“心の世界”いってみれば精神世界だからだ。

シオンがここに来る用はたった一つだけだ…。

「呼んだか？シオン」

「シン！」

そう…シンに会うためだ…。

シンは灰色の髪に紅と深緑の虹彩異色<sup>ふかみどり オッドアイ</sup>の瞳の青年で、シオンとは12コ上の20の青年だ。

だが彼は…年を取らない、否…取るのが遅いのだ。

もちろん、シオンは理由を知っていた…が、今はその話はやめておこう。

今回、シオンがここに来たのは彼に相談するためだ…。

「シン、話があるの…聞いてくれる?」

すると、シンは鼻で笑い言った。

「愚問だな…俺は元からそのつもりだが?」

＊＊

その次の日の昼、ナツ・フリーは農作業中のジャンに話していた。因みにシオンは家でジェーンの手伝い、ケルベロスとバツボはナツ達と一緒にいた。

「ねえジャン!!ボクたちにまかせてよ!!!」

「何をっスか?」

「人狼三兄弟の退治だよ!!予告状がきたってことはソイツら来るんだろ!?!」

二人の発言にケルベロスが驚いた。

「本気かいな?!フリーはともかく、ナツは大丈夫なんか!?!」

「「それどーゆー意味!?!」」

フリーとナツがハモった直後、バツボが言った。

「ほお　　っ…カッコよいのおフリー！ま、ガンバルのじゃぞ  
っ」

「何いつてんの？ケルベロスもバツボもやるんだよ？」

「わいも！？」「なんでじゃ？」

「だってケルベロスうゝ…頑張ったらシオンの特製デザート食べれるかもしれないよ？それに、バツボは紳士ジェントルマンなんでしょ？紳士ジェントルマンは困ってる人を助けるものだと思うなあゝ…」

その言葉で、二人（？）のスイッチが入った。

「いよっしゃああああああ！…やっтарうやないかああああああああ！…！」

「ふっ…致し方あるまい…紳士ジェントルマンとしては…見過ごせぬなあ…」

と、盛り上がってる二人（？）をみて、ジャンは笑った。

「フリー、ナツ、ケルベロス、バツボ…アンタら…いいヤツっスね

…けど、ケツコウ!!」

その瞬間、ケルベロスとバツボの上に“ガーン”という字の石が落ちてきた。

「な、なんでだよ!？」

「オイラとしてもありがたいつスよ?でも…それじゃあダメなんス! オイラは…オイラは」

オイラは自分の力で道を開きたいんス!!そして…意気地なしを捨ててゐんス!!!!!!」

そう言い切った。

「ジャン…！」「よせフリー」「バツボ！でも…！！！」

「今のジャンの言葉を聞いたじやろう…彼は今、真の男になろうと  
しておるのだ…察してやれ…」

「…うん………」

フリーはまだ納得がいかないようだったが、渋々了承した。  
因みにバツボの発言はこの後、「今のワシどうじゃった?!」の  
一言で帳消しになったという。



### #03「ジャンの決意」(後書き)

作者「バツボカッコ悪っ!!」(笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7684y/>

---

FAIRYTAIL ～ 姫と半吸血鬼 ～

2011年11月30日19時48分発行